# 万年発情期のバニーボーイ

# 一

不祥事を起こして協会からもジムからも追いだされた、俺は元プロの格闘家。

業界には、もどれないにしろ、せっかく鍛えあげた肉体と腕っぷしの強さを活かせる仕事につきたく、夜の町へと。

用心棒として雇ってもらいたかったのだが、訪ねる店の先々で、裏社会の人にスカウトされて、なかなか、うまいこといかず。

裏社会の連中と深く関わらず、夜の町で仕事をするのは難しいよう。

アキラメズに探したところで、ようやく、こちらの条件を飲みこんで雇ってくれたのがバニーボーイのお店。
男たちがバニーガールの衣装を着て、網タイツにピンヒールをはき、酒を提供しながら接客するところだ。

このごろは警察の取り締まりがキビシイに、本番はもちろん、準ずる性的な行為も厳禁。
といっても、バニーボーイが煽るような刺激的な格好をしていれば、つい手をだしてしまう、なっていない客が後を絶たないため、用心棒が不可欠。

まあ、グレーゾーンな店はどこでも、こういった仕組みになっているものを、このバニーボーイの店は、もっと徹底的に管理がされている。

万が一に店内で過ちが起こらないよう、バニーボーイに貞操具の装着を義務づけるという。
股間とお尻、どちらも金具でがっちりガードされ、トイレをしたいときは、いちいち店長に鍵で外してもらわないと。

しかも、すべての従業員も強制的に。
さすがにバニーボーイほど本格的なものでなく、トイレは自由にいけるし、金具に覆われているのは、ちんこだけ。

まあ、俺はバニーボーイに欲情せず、イタズラ心もなかったに、貞操具装着にさほどタメライはなく。
ただ「用心棒でも、バニーボーイの格好してもらうから」と指示されたのには「えええええー」と不服だったが。

曰く、いかにもな用心棒風情が見回っていると、客が心ゆくまで現実逃避してタノシメないからだとか。
「いや、バニーボーイの格好したって、こんなムキムキなの、どうせ浮くでしょう」とケチをつけるも「いやいや、そういうのスキなお客さん用のマッチョバニーもいるから」とか。

で、しかたなくバニーボーイに扮して、店内を監視し、ヘルプボタンが押されたら駆けつけて、ルール違反の客を外に放りだす日日を、思ったより、忙しく過ごして。

ある日のこと、店ナンバーワンのウサミがヘルプボタンを。
急行すると、ぐったりとソファにもたれる彼に、客の親父が舐めたり口づけしたり。

いつもどおり「はーい、お帰りくださーい」と追っぱらいつつ、胸騒ぎがして、個室にもどってみると、顔を真っ赤にしたまま、しきりに胸を上下させ、呼吸困難に陥っているウサミ。

「薬を盛られたのかもしれない！」と抱えあげて、地下の医務室へと。ベッドに寝かせ、とりあえず、ウサギの耳を外そうとしたら。

引っぱっても、カチューシャがとれないし「う、ぎい・・・！」とイタガルし。

ほんとうに、耳が生えているようで「いや、まさか」と思い、耳から手をはなし、店長を呼びにいこうとしたら。

「あーウサミ、発情しちゃったかあ」と店のナンバーツーの生意気キャラが売りのウサキチが入室。

ウサミとウサキチが兄弟なのを思いだし、つい長い耳を見たなら、なんと、片方がぴんぴんと曲がって伸びての繰りかえし。

「ああ、じつはね、俺たち兄弟、十五才でウサギの耳が生えたんだよね。
なぜかは分からないけど、まあ、親父がクソだったから、ウサギをイジメて呪われてでもしたのかね？

で、ウサギの耳を活かして働けるここに身を置いててさ。
隠さなくていいのが利点といっても、弊害もあって。

どうも、俺ら体質もウサギのようで、発情しやすいんだよ。
ホンモノのウサギみたいに年中発情期ではないけど、興奮しだすと、もー手がつけられない、だからさ・・・」

「そーそーここ、元カラオケルームで防音、効いているから」といい、カチリと鳴らした。

どうして、鍵を閉めたんだ？と首をひねる間もなく。

「あああああああ！」とウサミが雄たけびをあげ、起きあがるや否や、俺の背中に跳びかかった。

体にしがみつかれて、転びそうになり、壁に頭をぶつける。

すぐに片手をついて、振りかえろうとしたものを、腕をうしろにねじ上げられ「う、ぐう！」とまた壁に頬を押しつける羽目に。

俺は元プロの格闘家にして、今もトレーニングを欠かさず、体力も筋力も維持しているし、すくなくとも、女の子のように華奢なウサミに、力勝負で負けるはずないのだが。